

解読した「寛文七年金沢図」の人名データ

石川県金沢城調査研究所

1 「寛文七年金沢図」解読の経緯

金沢城調査研究所では、金沢城と城下町の相互関係を解明するため、金沢城図だけでなく城下町図についても数年前より基礎調査を進めている。城下町図を通し城下町の空間構造を考察することは、金沢城の縄張りの特徴や城地のもつ空間的（あるいは地政的）意味を解明するうえで必要なことであり、多くの示唆が得られると期待し取り組んでいる。城あつての城下であり、城下なくして近世城郭は成り立たない。城と城下の密接不可分の関係性を具体的に検証するには、数ある金沢の城下町図のなかから正確な住民情報をもつ城下町図を選定し、その詳細な解読や比較検証により、上記の課題にアプローチすることが必要であろう。

「寛文七年金沢図」と「延宝金沢図」は、17世紀後半の城下町金沢の全域を正確な図法で描くだけでなく、多くの土地利用情報と人名記載をもつ大型地図として古くから注目されてきた。この両絵図が石川県立図書館に所蔵されるに至った経緯は明確ではないが、両絵図とも加賀藩が作成した公用地図であることは間違いない⁽¹⁾。江戸時代前期（17世紀後半）の信頼のおける城下町絵図として定評ある、この両絵図を詳細に解読することは、城と城下の相互関係を究明する基礎作業として、ぜひとも取り組んでおくべき課題といわねばならない。

両絵図のうち「延宝金沢図」（以下「延宝図」と略称）のほうは、明治後半には周知の絵図資料であつたらしく、明治期に多数の郷土史考証を行った森田平次は、すでに「延宝図」を彼の代表作『金沢古蹟志』のなかで随所に引用する。のみならず森田は「延宝図」の手写図を作成しており、今も石川県立図書館の森田文庫に所蔵される。石川県立図書館にはもう1本、森田写本と同系統の「延宝図」写があり、原本と合わせ3点の「延宝図」を所蔵する。このほか大正2年に郷土史家氏家栄太郎が写した図や大正15年に村上氏が写した「延宝図」が金沢市立玉川図書館に保管されている⁽²⁾。いずれも一辺2尺以下の一回り小さい絵図であり、昭和以後の郷土史研究は、これら「延宝図」写図によって行われた。原本のほうは一辺5尺を超える巨大絵図であつたため、閲覧に大きな制約があつたためである。

「延宝図」原本を手写するには相当の緻密さ、根気が必要であり重労働であつたと推察される。しかし、「延宝図」写図を今日、原図と比べてみると齟齬や相異が少なくない。森田写本には笠舞付近に大きな貼紙があり、屋敷廻りの実寸などがまとまって省略される地区がある。何か特定の意図があつて行った修正かもしれないが、原本に忠実といえない箇所があることは確実であり、無批判に写図をもとに考察することは問題を残す。写図には、こうした不備はつきものであり、やむを得ないことである。写図を利用する側が、むしろ、写図のもつ特性を書誌学的な観点から史料批判することが重要である。「延宝図」の4点の写本と原本との相互関係について、十分な検証がなされぬまま、写図を利用してきただけこそが、反省すべき点であつた。

とはいえ手軽に閲覧できる金沢市立玉川図書館蔵の氏家写本や県立図書館の森田写本は、戦後の城下町研究でしばしば利用され、大型図版として流布し全国的に周知されたことは⁽³⁾、それはそれとして評価できる。「延宝図」写図を利用し、多くの研究成果が生み出されてきた意義を認めたくえて、今後の城下町絵図研究においては、「寛文七年金沢図」（以下では「寛文七年図」と略記）や「延宝図」の原本を対象に研究を進める必要があることを強調しておきたい。

幸い平成11年に『金沢市史（資料編18）絵図・地図』が刊行され、両絵図原本の大型図版が付録図として頒布されたので、研究環境は大きく転換した。両絵図の原本によって、改めて城下町の空間構造を正しく検証し直す必要が、研究者の間で共有されるに至った。同時に、パソコン画面上で絵図資

料を解読することが可能となったことも、このような気運に拍車をかけた。当研究所でも金沢城絵図をデジタル画像によって解読し、詳細な比較検証を行い多くの成果を生み出してきたが、「寛文七年図」「延宝図」についても解読する環境が整ってきたといえる。巨大な絵図資料を電子データ化し、最新の地図データ（GIS地図情報）と重ね合わせて解析する作業は、工学部の建築史・都市史分野で大きく前進している。こうした研究グループとの学際的な共同研究は今後ますます広まっていくであろうが、当研究所でも、金沢城調査研究専門委員会の委員である増田達男教授（金沢工業大学）と連携し、この分野での学際研究を模索している⁽⁴⁾。

戦後、一貫して城下町金沢の研究を牽引してきた田中喜男⁽⁵⁾、城下町絵図にいち早く注目し検討を重ねた増田壮登男⁽⁶⁾の両氏によって、金沢の城下町図の基礎研究がなされ、編年の分類や系統的整理が進んだ。しかし、「寛文七年図」については、閲覧しやすい写図がなかったこともあり、内容の詳細な考察は等閑に付されてきた。

2000年以後の研究環境の変化をうけ、われわれは昨年、両絵図を活用する最初のステップとして、まず「寛文七年図」の文字情報解読とデータ化に着手した⁽⁷⁾。同じ頃、石川県教委から増田教授に、城下町金沢の空間構造に関する基礎研究を委託したこともあり⁽⁸⁾、「寛文七年図」「延宝図」の文字情報解読を本格化させた。今回われわれが解読した文字情報は、増田研究室が谷明彦研究室と共同して作成している「寛文七年図」の電子地図上に載せる予定であるが、そうなれば城下町の空間構造解明に益するところは大きく、多方面から興味深い研究が展開されるものと期待する。今号および次号において紹介する「寛文七年図」の人名データが、その基礎データとなることを願っている。

なお、「寛文七年図」「延宝図」の解読作業は、木越隆三が中心となり石野友康・池田仁子とともにすすめた。絵図に地番を与える基本方針などは、金沢工業大学の増田達男・谷明彦両教授と木越が協議して決め、絵図からの文字情報の読み取りは、主に池田と木越があたった。データ入力や点検には石野のほか吉田秀子の協力を得た。最終的なデータ整理は木越が行ったが、なかでも煩雑な絵図の文字情報の読み取りや侍帳との照合などを長時間にわたり根気強く取り組み、このプロジェクトを支えていただいた池田仁子に深く感謝したい。この報告文は、木越の責任でまとめた。

2 「寛文七年図」と「延宝図」の概要

「寛文七年図」の解読データを紹介する前に簡単に、石川県立図書館所蔵の両絵図の記載内容や作成事情などを、周知のことも含め簡潔に紹介しておきたい。

◎「寛文七年金沢図」(560cm×501cm 石川県立図書館蔵)

本図に測量線と理解される朱線が街路中央に引かれるので、測量にもとづく地図として作成された点に注意しておきたい。城下町全域をカバーした、当時最高レベルの地図作成技術による精度に優れた大型絵図である⁽⁹⁾。縮尺は1分1間の分間図であるから600分1とみるべきであろう。甲州流兵学者で測量家・城図作成家としても知られる有沢武貞（加賀藩士）は、その代表作、享保19年「加州金沢城下町割正極之大図」(243×284cm)の「賀州金沢町割之図成之弁」のなかで、「享保五年七月下旬、横山大和守・小野貴林ノ許ニ万治年間ヨリ寛文五六年頃迄ノ金沢ノ大絵図<但シ分間ノ大図也>有之<大キサハ三間四方>、其兄君タル奥村内記平温良ノ許ニ抛テ、頼之テ大図ヲ借講、即時ニ同門ノ学弟十余人ヲ云談ジ栖老亭ニ集テ、八月中旬迄ニ臨書シ畢リ、時ヲ不移三分十間ノ積ヲ以テ、其大図ヲ縮メテ、端々不定ノ所ヲバ、自身走り廻リテ見分シ図シ加フ」と述べる。つまり、享保5年に武貞が横山家から借りた「寛文五六年頃までの金沢の大絵図」(〈 〉内は割書)「三間四方」は現存の寛文七年図とほぼ同じサイズであり、これを「分間の大図」と注記しているいじょう「分間図」すなわち600分1図とみるのが自然である。『金沢市史』(絵図・地図編)は、あえて690分1と考証したが、これは絵図上の誤差のある長さを実測値で割り返した結果であり、絵図作成者の意図したものではない。

また絵図下の凡例注記で「小松より引越并金沢者被下屋敷、先規絵図之表直シ申候事、但、此絵図



図1 「寛文七年金沢図」(560cm×501cm、石川県立図書館蔵)

最前、子ノ十月切二仕置候所、其より末相渡候屋敷之分重而相改、寛文七年十月迄、所々渡替人之屋敷書記申候」とあることから、「寛文七年図」に先行して、同形式の「万治三年金沢図」が作られたこと、また万治3年からの藩士移住と屋敷替により改訂の必要があり、寛文7年10月迄に生じた屋敷地変化の調査をもとに改訂した絵図であることがわかる。本図が寛文7年作成図であることの根拠は、この注記にあり、今回の人名データ解読でもこの点と矛盾はなく、成立年代の裏付けは十分得られた。また、寛文7年末から延宝元年までに、代替わりや別家への屋敷替え、別地種への利用替えなどの変化が相当数あったから、「延宝図」が必要とされたのであり、その辺の事情は両絵図を詳しく比較検証すればするほど明らかとなるであろう。

すでに両絵図を比べ、奥村時成が亀松から中務へ、前田貞勝が又勝から備前へ、津田正真が内蔵助から玄蕃に名乗りを改めたことが指摘されており(田中喜男1977「城下町の成立・変容」)、ここから、こうした名前の変化時期は寛文8年から延宝元年までの6年間であったと特定できる。両絵図の比較結果については、つぎの木越論文で二三考察を加え、医者の方角については池田論文で検討する。

「万治三年図」の作成理由は、小松城に隠居していた前田利常が万治元年に死去、隠居領の22万石と400名を越す小松家臣団が本藩に返還統合されたため、多くの小松在住利常家臣が金沢に移転したためである。その結果、万治～寛文年間に、城下町金沢の武家地で大幅な入れ替えがあり、それが巨大城下絵図(万治3年図・寛文7年図・延宝図)を6～7年おきに3回も作った理由と考えられる。なお、本絵図の凡例注記の大半は、人持組士34家の下屋敷を表記するための符牒の列記である。

◎「延宝図」(590cm×545cm 石川県立図書館蔵)

本図の作成年次は凡例注記をみるだけでは不明であるが、延宝2年10月に死去した前田三左衛門(直之)屋敷をその名前で載せ、延宝元年に跡目相続した深美右京を載せるので、延宝元年に作成されたとみてよからう。サイズは「寛文七年図」より少し大きい、記載様式、作成目的ともに「寛文七年図」を踏襲したものといえる。したがって、①巨大彩色図。東西南北の方角を記し街路は黄色、水路・



図2「延宝図」(590cm×545cm 石川県立図書館蔵)

川は水色で彩色。②城内は彩色せず、ごく簡単に縄張りを記すだけ。③城外の武家地・町地・寺社地等の配置を主眼とする藩用図。④作成目的は藩主閲覧用。⑤幕用図（いわゆる「寛文八年図」など）と異なり、主要街路だけでなく枝道も詳細に記載。藩士の屋敷割線を明示し、姓・名だけでなく屋敷周囲の長さも記す。⑥町人地・下屋敷・百姓地などは、一軒ごとの屋敷割線を略す。⑦寺社は、藩から屋敷地を与えた寺院についてのみ寺社名・敷地サイズを記す（地子地にある寺院名記さず）。などの点で両絵図は共通し、同じ作成目的をもつ藩用図であった（後掲木越論文参照）。

これにたいし、両絵図の相異点は以下の通りであった。

- ①延宝図では街路中央に記した測量線（朱線）が消去された。
- ②屋敷割の変更により敷地割も変化した区画が一定数ある。とくに惣構外側で多い。
- ③代替わり、屋敷替え、地種替えなどで、居住者名が変化したり利用法が変わった箇所は、区画数の約1割程度にみられる（後掲木越論文註（18））。代替わりで父から子へ名前が変わった武家地は約14%（惣構内で同姓名前のみ変化100件）あり、惣構内の709件のうち約26%（惣構内部）で利用実態に何らかの変化があった。
- ④惣構の彩色を浅黄色から黒色に変えた。延宝図の黒太線の惣構ラインが鮮明。

上記のうち、②③は「延宝図」の作成理由に付随する変化であり、絵図にある凡例注記にも「小松より引越并金沢者被下屋敷、先規絵図之面直シ申候事」とあるように、当然の相異点である。絵図に描かれた下屋敷の符牒列記は「寛文七年図」より少なく27家にとどまるが、凡例にない人持士の下屋敷地ものせる。

また「万治三年図」「寛文七年図」「延宝図」の前提となる城下町図は、「正保城絵図」と推定されるが、金沢の「正保城絵図」は現存しない。しかし、他の正保城絵図の図柄を見ると、「寛文七年図」「延宝図」のほうが測量図としてみた場合、数段精度が向上しており、17世紀中葉に絵図作成技術が著し

く向上したと考えている⁽¹⁰⁾。

3 解読したデータについて（資料紹介）

今回解読した「寛文七年図」の文字情報は、表1に示したように3653件にのぼる。このうち人名記載は1757件、寺社名データ135件、藩役所等公的施設名データ58件について4つの表に整理した。掲載にあたり藩士名・寺社名・藩役所名を辞典的に検索利用できるよう地番順ではなく五十音順に配列した。ただし、Ⅱ表は紙数の制約のため次号に掲載せざるを得ないのでご容赦願いたい。以下、それぞれの表作成の原則を解説しておきたい。

Ⅰ表：「寛文7年図 惣構内部A-J地区藩士リスト（527件+17件）」

Ⅱ表：「寛文7年図 惣構外部K-S地区藩士リスト（1230+38件）」

Ⅲ表：「寛文7年図 寺社名一覧（135件125寺社）」

Ⅳ表：「寛文7年図 藩役所・公的施設一覧（58件48施設）」

まず4つの表の固有名詞や文字情報すべてに地番を付与した。電子地図と連動させるため、地番の与え方は、増田・谷岡教授と協議した結果、地区・街区・地番（将来の分筆・統合などの変化に対処するため分筆枝番も付与しているが、それは今回の表示では略した）の三段階で表示することにした。図版3（折り込み）に示したように、地区は城下町を19地区に大きく分けアルファベットA-Sで示したが、地区ごとの特徴を把握しやすいように、惣構、川、幹線道路、大型水路を区画線とし区分した。内惣構の内部はA～Eの5地区、内惣構と外惣構の間はF～Jの5地区に分け、いずれも城の南部から時計回りに配置した。

外惣構の外は9つに区分した。まず石引道を起点にK～Qの7地区を時計回りに配置し、犀川南部はR地区、浅野川の北部はS地区とした。そのうえで各地区の内部を大きな街路を基準にいくつかの街区（最小で1、最大で30）に分け、屋敷地一筆ごとの地番は街区ごと1番から連番で与えた。街区と地番の配列は、おおむね北から南へ、東から西へと機械的に連続番号を与えるようにしたが、見易さに配慮した所もあるので恣意的な面が残る点は断っておきたい。この地番は、金沢工業大学増田研究室で作成中の「寛文七年図」の画像データの地番にリンクさせているので、ここに表示した氏名・身分・石高などのデータを載せることが可能である。地区ごとの街区数、地番の最終番号を総括すると表2の通りとなり、地番総数は3561となる。文字情報件数と食い違う数（92件）は、同じ地番内に複数の人名記載や文字記載があったから生じた場合が多く、「延宝図」での地番統合などに連動させ別

表1 寛文7年図の記載分類（人名件数総括）

拝領地の利用身分	A-J区	K-S区	全城合計	地種分類
屋敷・街区の区画総数	709	2944	3653	分類番号
①無記・明地	26	189	215	0
②藩役所・公的施設	14	44	58	10
③姓名記載	527	1107	1634	20・30・35・40・45・55
④名前だけ記載	0	123	123	35・45・55
⑤地子地（武家請地含む）	53	627	680	70・75
⑥輕輩（足輕・小者）組地	1	281	282	50
⑦下屋敷地	0	177	177	100
⑧本町	73	130	203	80
⑨地子町	2	55	57	85
⑩寺社名記載	3	132	135	60
⑪寺社門前地	10	18	28	65
⑫百姓地	0	61	61	90
<合計>	709	2944	3653	

表2 寛文7年図の地番構成

街区	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	合計 676
1	1	1	7	21	8	25	17	7	4	14	
2	7	*	10	18	6	36	28	16	21	8	
3	1	*	12	7	6	9	20	11	25	21	
4	*	*	5	3	3	21	*	50	42	15	
5	*	*	*	*	*	21	*	31	9	23	
6	*	*	*	*	*	3	*	18	*	*	
7	*	*	*	*	*	*	*	44	*	*	
8	*	*	*	*	*	*	*	16	*	*	
9	*	*	*	*	*	*	*	5	*	*	
小計	9	1	34	49	23	115	65	198	101	81	

街区	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	合計 2885
1	37	39	12	40	21	10	9	25	7	
2	63	36	25	14	8	19	13	28	15	
3	32	27	19	28	11	21	8	14	10	
4	35	53	10	23	14	11	28	18	9	
5	28	26	38	12	4	5	6	11	28	
6	6	28	16	22	20	31	35	7	11	
7	9	36	19	10	22	14	6	2	19	
8	2	31	34	15	11	21	12	24	21	
9	*	25	33	35	12	17	10	12	11	
10	*	*	17	15	22	17	13	9	17	
11	*	*	34	39	32	57	22	12	29	
12	*	*	9	22	9	48	12	15	25	
13	*	*	*	14	30	37	25	14	6	
14	*	*	*	30	7	29	6	17	11	
15	*	*	*	37	10	26	5	13	10	
16	*	*	*	24	17	6	17	11	9	
17	*	*	*	47	16	10	6	*	32	
18	*	*	*	11	13	*	*	*	17	
19	*	*	*	27	7	*	*	*	18	
20	*	*	*	20	6	*	*	*	20	
21	*	*	*	*	*	*	*	*	18	
22	*	*	*	*	*	*	*	*	21	
23	*	*	*	*	*	*	*	*	11	
24	*	*	*	*	*	*	*	*	9	
25	*	*	*	*	*	*	*	*	23	
26	*	*	*	*	*	*	*	*	13	
27	*	*	*	*	*	*	*	*	9	
28	*	*	*	*	*	*	*	*	21	
29	*	*	*	*	*	*	*	*	14	
30	*	*	*	*	*	*	*	*	21	
小計	212	301	266	485	292	379	233	232	485	

総計 676+2885=3561

19地区：193街区：3561番地

筆であっても同じ地番を与えた場合がいくつかあるためである。

I表とII表は、いわば「寛文七年図」掲載の藩士名簿といってよい。合わせて1757件の人名データは外惣構の内と外で分けて紹介することにした。区分した理由は惣構の内と外で土地利用の仕方に大きな違いがあったからであるが、データ処理のミスを少なくするためでもあった。

個人別の記載データは、(i)地番表記(地区・街区・地番)、(ii)氏名、(iii)分類、(iv)「寛文11年侍帳」情報(年齢・身分・役職、知行高)の順に掲載した。但しI表の末尾に「延宝図」との異同を5種類に区分し示した。0は同一記載、1は姓が同じで名が変化しているもの、2は別姓の別人の屋敷に変化したもの、3は地種そのものが変わったもの、4は延宝図に何も記されなくなった箇所、5は逆に寛文七年図に記載がないのに「延宝図」のみ土地利用されている箇所である。III表・IV表には④「寛文11年侍帳」情報はなく、III表は宗派別に分けて五十音順に並べ、IV表では備考欄を設けた。

I表II表に登載した人名はすべて加賀藩士である。(iv)の知行高・身分・役職データは寛文7年に最も近い「寛文11年侍帳」のデータに依拠した。しかし、刊本『加賀藩初期の侍帳』に収録された「寛文11年侍帳」は、石川県立図書館所蔵の森田文庫本を底本とし、これに編集者(太田敬太郎)が校訂を加え、森田本以外の写本を参照し森田本の不備を校訂・修正しているのので、『加賀藩初期の侍帳』収録データをそのまま使うのは避けた。そこに校訂箇所、修正理由などが明示されていないからである。底本である森田本が、どのように修正されたか不問に付したまま、刊本データに依拠すると、今後の史料批判や検証に支障がでる。将来の研究者が検証するとき、底本を特定するか校訂記録付きの刊本でないと、史料の真実性の点検に不都合が生じる。それゆえ「寛文七年図」人名データとの比較や情報追加には、校訂前の森田本そのものをデータ化して使った⁽¹⁾。森田文庫本「寛文11年侍帳」の電子データ化は、すでに平成16年に済ませてあったので、この電子データを基本とし、適宜『加賀藩初期の侍帳』に収録された「寛文元年侍帳」の御歩人名や人持リストなどを参照したが、表示にあたっては「寛文11年侍帳」の情報に限定した。共用範囲の広いデータベースは、極力シンプルであるほうが誤解を与えないからである。

個別の藩士名の考証については、「諸士系譜」「由緒井一類付帳」(加越能文庫、金沢市立玉川図書館蔵)や各家の由緒書・系図などを用い補足してゆけば、今後、さらに正確で中味の充実した藩士情報となろう。そのような作業は、この藩士人名データベースを活用する研究者が、それぞれに肉付けし完成度の高いものにしていくしかない。そうした研究成果を、ぜひ当研究所に寄せて頂ければ有り難い。

(iii)分類は、絵図の記載内容および「寛文11年侍帳」データをもとに、藩士の身分階層が浮かび出るよう仮に大別したものである。分類区分は表3に示した通りであり、表1で区分した12地種を基本に、名前記載のある者については、上士=20、中士I(平士)=30、中士II(組外平士)=35、中士III(平士並)=36、与力=39、下士(御歩)=40、御歩並=45、大工・技術者・御小人等=55の8階層に細分した。但し、本号に掲載したI表には[36][39]に該当する藩士はいなかった。この階層区分の根拠や分類原則については、木越論文で詳述する。

「寛文11年侍帳」において同一人物を特定できないケースは、惣構内部で約3割、外部で約5割存在したが、こうした絵図にしか見えない人名については、原則、平士(同並)以下の身分とみなし、絵図上で、医者・掃除坊主・穴太などの表記のある者は[45]、大工・職人・御小人などであることがわかる人名は[55]に区分した。この身分区分については、木越論文を参照されたい。侍帳と同定できない藩士については×印を付した上で、上記のごとき40・45・55の3種類の区分番号を付した。

なお「寛文11年侍帳」との人名比定にあたり、絵図は「権左衛門」、侍帳は「権右衛門」とある場合などは一致とみた。また「延宝図」に書かれた名前や年齢ほか系図資料などで親子と推認された場合もあり、「寛文七年図」と「延宝図」が親子それぞれの名前を記し、「延宝図」の名前と侍帳が一致するケースも一致例とみた。名前の1文字程度の齟齬については積極的に同一人と評価した。侍帳との人名比定は、できるだけ同一人と判断できるよう一致点を探し評価したが、今後の検証で改めるべき

点がでるかもしれない。なお、I表の侍帳情報欄に絵図の名前表記と異なる場合できるだけ侍帳の名前表記を「」内に示した。多くの研究者に利用され改訂されてゆくことで、この基礎データの精度は上がってゆく。同時に「寛文11年侍帳」の不備も是正されてゆくものとも考える。最終的に寛文年間の加賀藩士の全体像もしくは、前田家中の全容を明らかにするには、こうした基礎作業をたゆまなく行っていく必要がある。そのための最初のステップとして、この解読データが重要な役割を果たすものと確信している。

以上で今年度取り組んだ「寛文七年図」解読事業の概要と今回紹介した4つの表の作成意図の解説を終わる。

表3 寛文7年図 身分別 地種区分

	区分番号	地 種	摘 要	件数
藩用地 ①	0	用途未定地	無記・「明地」	215件
	② 10	藩役所・公的施設 (IV表)	藩用地、藩役所・米蔵・貸屋ほか火除地・水溜・一里塚なども含む	58件
侍帳登載者 ③④	20	上士 武家屋敷	人持以上の重臣層	63件
	30	中士 武家屋敷 (中士Ⅰ)	平士クラス (馬廻・小姓等) の屋敷	857件
	35	組外平士 # (中士Ⅱ)	医者・学者・掃除坊主など技芸者も含む	35件
	36	平士並 # (中士Ⅲ)	歩小頭、厩組など24人のみ	4件
	39	与力 (下士)	寄親付与力、組付与力、本組・明組与力など	80件
侍帳に登載されない者(×) ③④	40	下士 屋敷地	定番御歩、新番御歩など	563件
	45	御歩並の下士屋敷地	細工人・医者・穴太・料理人など	44件
	55	屋敷拝領の御大工・職人・奉公人等	姓なき技能者、御小人・博労などの直属奉公人	111件
人名なし ⑥	50	輕輩組地 (足輕以下の輕輩の屋敷)	足輕・小者などへの拝領地	282件
⑩	60	寺社地 (Ⅲ表)	神社・寺院名記載のあるもの	135件
人名なし ⑤	70	地子地	武士・寺社・町人いずれも利用	625件
人名登載 ⑤	75	武家請地 (医者も含む)	利用する藩士名を記す。地子地の一部	55件
人名なし ⑧	80	本町 (朱書町屋)	町役負担の町人拝領地	203件
人名なし ⑨	85	地子町 (地子+朱書町屋)	地子負担する一般町人地	57件
人名なし ⑪	65	寺院門前地	寺社奉行管理地、地子徴収地	28件
人名なし ⑫	90	百姓地	郡地、村方の年貢地、「相対請地」	61件
人名なし ⑦	100	下屋敷地	3000石以上の上士の陪臣居住区	177件

・区分番号の左側に付した①～⑫は表Iに示した12地種の番号である。

〔註〕

- (1) 『石川県立図書館七十年のあゆみ』(1983年)によれば、県立図書館の前身である勸業博物館図書室に前田侯爵家より多数の図書を借出し閲覧に供していたという。勸業博物館図書室が閉室した明治41年時点で9万冊もの図書を借り受けていた。両絵図は明治45年の県立図書館創設時に、何らかの事情で県立図書館の保管するところになったものと想像されるが、詳細な事情は不明である。
- (2) 現存する延宝図の写図のサイズは、森田文庫本190×165cm、県立図書館本203×176cm、大正2年氏家栄太郎写本は190×167cm、大正15年村上写本は185×158cm (もと金沢市観光会館蔵) であった (田中喜男1977)。
- (3) 『別冊太陽 城下町古地図散歩Ⅰ (金沢と北陸の城下町)』(平凡社 1995年)の付録となった延宝図写図などがその代表である。その他、大きなカラー写真で紹介された写図の事例は枚挙に遑がない。
- (4) 増田達男研究室では、すでに江戸後期の城下町絵図の電子データを活用し、城下町の空間構成に関し様々なビジュアル資料を提供している。また「延宝図」については、同氏『延宝金沢図』にみる城下町の空間構造―身分別居住地の配置構成から― (『年報都市史研究』14号、2006年) などの成果がある。

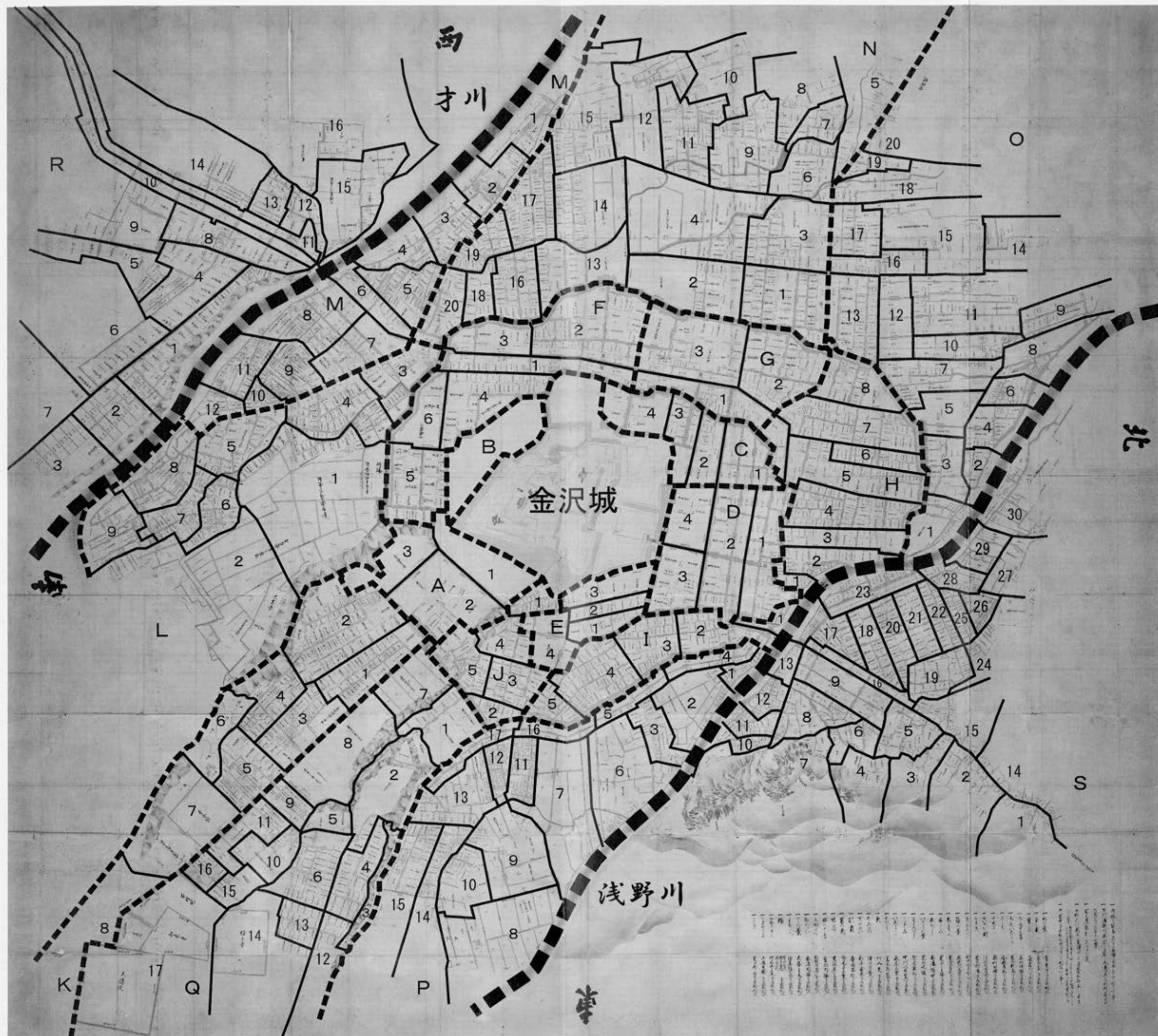


図3「寛文七年金沢図」の地区・街区割

- (5) 田中喜男「城下町古絵図について」『金沢経済大学論集』7—1、1973年。同「城下町の成立・変容」『伝統都市の空間論・金沢』弘詢社、1977年。
- (6) 増田荘登男「金沢城下 古図のしおり」私家版1962年。同氏は『金沢市史（資料編18）絵図・地図』（金沢市、1999年）の「城下図」の項で永年の研究成果を公表された。
- (7) 「万治三年図」が作成された事実は明らかとなったが、正保城絵図も万治三年図も現存していない現状からすると、「寛文七年図」が藩作成城下図の最も古い現存図ということになり、両絵図のうち「寛文七年図」を解説することを優先すべきと判断した。なお最近の両絵図に関する主な研究成果としては、2000年10月に行われたシンポジウム「城下町 再発見」での木越隆三・竹松幸香・横井美里の共同報告があり、3人は「延宝図」に記載された藩士名の読み取り作業を試み、調査結果の中間報告を行った。このとき解説した約1900人の藩士データはパソコンの不具合等で消失し研究は頓挫した。その後2005年11月、東京大学の吉田伸之氏や「とらっど3」のよびかけで、都市史研究会・北陸都市史学会共催のシンポジウム「都市の権力と社会＝空間」が行われた。そこで木越・増田は『延宝金沢図』にみる城下町の空間構造を共同報告した。また木越隆三「金沢城の地割図と二の丸御殿絵図」（『金沢城研究』3号、2005号）でも、両絵図の特徴を論じた。
- (8) 平成20年度、石川県は城下町金沢の世界遺産としての普遍的価値解明をめざし基礎研究の委託を行った。増田氏は「城下町絵図による金沢の町割・街路等の変遷に関する基礎研究」をテーマとし、石川県金沢城調査研究所とも連携し基礎研究を進めている。
- (9) (10) 木越前掲「金沢城の地割図と二の丸御殿図」『金沢城研究』3号、2005年。同『延宝金沢図』にみる城下町の空間構造—武家屋敷地の配置を中心に—『年報都市史研究』14号、2006年。
- (11) 侍帳データについては、刊本『加賀藩初期の侍帳』のデータを電子データに置き換えるだけでは、照合史料として不十分と考え、寛文・延宝期の侍帳史料の収集や史料批判を行った。その結果、「寛文七年図」と「延宝図」に記載された藩士名を照合するには、「寛文11年侍帳」が適切であり、そのほか「寛文元年侍帳」や「延宝五年侍帳」なども併用すると、より精度が良くなると判断した。しかし、照合の基本台帳として使える侍帳データは、目下「寛文11年侍帳」だけである。



図4 「寛文七年図」H地区1・2・3・4街区

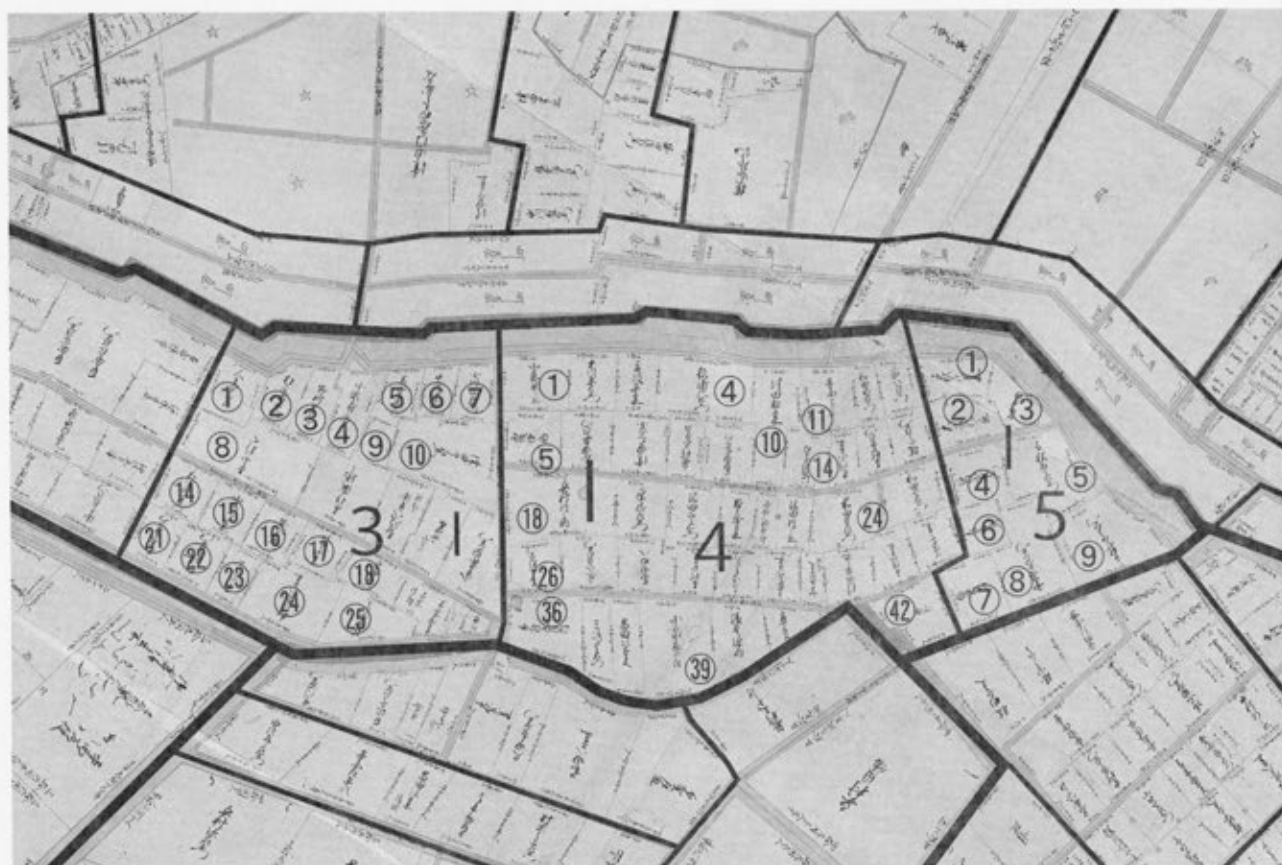


図5「寛文七年図」I地区3・4・5街区

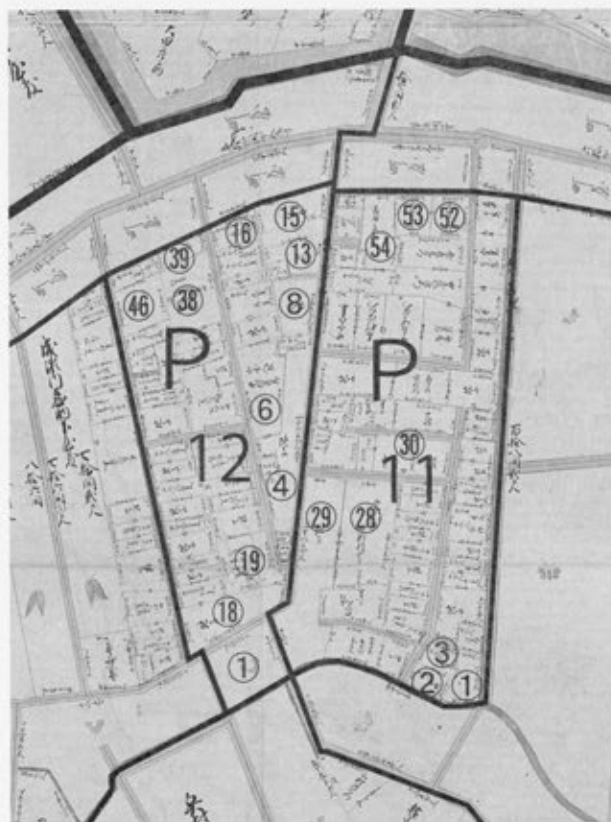


図6「寛文七年図」P地区11・12街区
(小立野与力町付近)

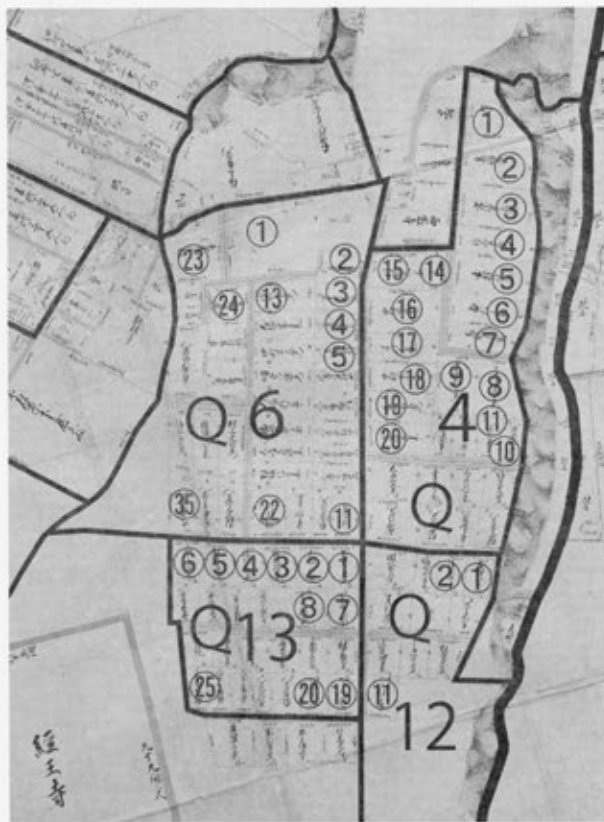


図7「寛文七年図」Q地区4・6・12・13街区
(御小人町付近)

I 表 寛文7年図 惣構内部A-J地区藩士リスト (527件+17件)

	地区	街区	地番	藩士姓名	分類	寛文11年侍帳情報、同帳表記	石高	延宝図比較
あ	H	07	33	青木権左衛門	30	42才馬廻 「権右衛門」	450	0
	I	04	26	青木新右衛門	30	63才小姓	120	0
	J	05	07	青木善右衛門	30	51才定番馬廻	70	0
	H	05	09	青木善四郎	30	65才馬廻	250	0
	J	03	16	青木善太夫	30	53才定番歩組小首	100	0
	H	06	03	青木弥八	×40	該当なし	×	3
	F	02	04	浅井源右衛門	30	48才小姓組頭	1500	0
	I	04	40	浅野源助	30	25才馬廻	250	0
	H	05	26	有沢孫作	30	61才馬廻、高岡町奉行	300	1
	F	02	18	有賀甚六	30	40才平士（組附弓大将）「有加」	1000	0
い	J	02	06	飯尾市丞	30	73才馬廻 「市之佑」	200	0
	F	05	02	飯山弥三郎	30	14才馬廻	60	0
	H	03	10	行山丹助	30	41才城番馬廻	150	0
	F	01	15	行山半四郎	30	32才異風	180	0
	H	05	01	池田治郎左衛門	×40	該当なし	×	1
	F	04	20	生駒伊兵衛	30	55才小姓	300	0
	H	08	09	生駒権兵衛	30	53才馬廻	500	0
	H	02	13	伊崎長右衛門	30	28才小姓	300	0
	F	05	03	石川三之佑	30	41才馬廻、「三佑」	300	0
	J	05	22	石川忠左衛門請地	75	60才前出（馬廻）	600	1
	J	05	23	石川忠左衛門	30	馬廻	600	1
	G	02	21	石黒采女	30	47才魚津馬廻	250	0
	F	01	14	石野義左衛門	35	45才組外「儀左衛門」	230	0
	H	08	04	石野五兵衛	30	59才馬廻、新川郡奉行	400	0
	H	05	15	石野半左衛門	×40	該当なし	×	3
	C	03	06	石丸吉之丞	30	41才射手	200	0
	H	02	08	磯松六左衛門	×40		×	3
	J	05	08	板津八兵衛	×40	該当なし	×	1
	I	02	20	板津兵助	30	60才小姓、大金奉行	300	0
	F	05	11	一色主膳	30	56才馬廻、「雅楽助」	1400	0
	F	05	05	一色瀬兵衛	30	48才小姓	600	0
	F	02	19	伊藤兵助請地	75	45才前出（人持）	2500	0
	F	02	20	伊藤兵助	20	45才人持	2500	0
	I	05	07	稲垣惣助	30	49才城番馬廻「宗助」	150	0
	H	05	13	稲垣与右衛門	×40	該当なし	×	1
	H	03	11	井上権之丞	×40	該当なし	×	1
	F	02	35	井野口次兵衛請地	75	<*8才馬廻「井口与三兵衛」父子>	<160>	1
	F	04	04	茨木権之佑	30	31才小姓「権丞」	500	5
	F	04	04	茨木伝右衛門	×40	該当なし	×	0
	H	07	19	今井左太夫	30	56才馬廻	400	0
	F	01	17	今枝伊兵衛	30	42才小姓	150	0
	F	02	25	今枝民部	20	59才無組付	14000	0
	H	07	37	今村九左衛門	×40	該当なし	×	0
	F	05	09	今村藤九郎	30	44才城番馬廻	200	0
H	05	05	岩田采女	30	67才馬廻	700	0	
う	I	03	19	上原勘兵衛	30	37才歩組小頭	100	0
	I	03	19	上原伝内	×40	該当なし	×	0

地区	街区	地番	藩士姓名	分類	寛文11年侍帳情報、同帳表記	石高	延宝図 比較
え お	H	0 3	05 氏家伊兵衛	30	27才馬廻	400	0
	H	0 4	36 氏家九郎兵衛	30	54才馬廻	200	0
	I	0 2	16 氏家内蔵允	30	39才小姓「内蔵丞」	550	0
	H	0 7	26 氏家長兵衛	30	51才馬廻	200	0
	H	0 7	21 氏家又太郎	30	12才異風	10人扶持	0
	G	0 3	08 いしゃ（内山）覚仲	35	77才組外、医師「内山覚中」	100	0
	G	0 3	16 江間慶賀	35	42才組外、歯医師「慶嘉」	60俵	0
	C	0 2	09 江間慶寿	35	47才組外、歯医者「竹林坊」	100	0
	G	0 3	09 江守平左衛門	30	42才馬廻	1000	0
	H	0 4	14 遠藤善四良	30	42才小姓「甚四郎」	500	0
	C	0 3	03 大石玄哲	35	<39才組外医者「大石三折」父子>	<200>	1
	H	0 1	04 大石斎宮	30	72才馬廻	300	0
	H	0 3	02 大河原助右衛門	30	63才組附鉄砲大将	850	3
	I	0 5	02 大窪権之丞	30	35才射手「権佑」	200	1
	H	0 6	17 大窪忠左衛門	30	53才鉄砲大将（作事奉行）	600	0
	J	0 1	11 大窪藤右衛門	30	53才射手	170	0
	J	0 2	04 大田庄之助	30	55才馬廻	1000	0
	F	0 4	07 大原伝兵衛	×40	該当なし	×	2
	H	0 4	49 大藪十兵衛	×40	該当なし	×	2
	E	0 3	02 岡島備中	20	26才人持	5000	0
	H	0 7	01 岡田九八郎	×40	該当なし	×	1
	H	0 6	12 岡田五郎右衛門	30	52才小姓、膳奉行	200	0
	F	0 3	05 岡田次大夫	×40	該当なし	×	1
	H	0 1	01 岡野治助	×40	該当なし	×	2
	H	0 1	03 岡野藤右衛門	×40	該当なし	×	2
	H	0 4	06 岡野半兵衛	30	48才異風	160	0
	J	0 3	01 岡本左源太	30	43才馬廻	350	0
	H	0 5	19 小川八郎右衛門	30	78才組附弓大将	500	1
	I	0 3	07 小川孫左衛門	30	46才小姓	300	0
	F	0 4	19 沖 八右衛門	30	63才馬廻	300	0
	G	0 3	12 穴生 奥 源三郎	×45	該当なし（穴生方・歩並）	×	0
え お	D	0 2	16 奥野宇兵衛	20	33才人持	3200	0
	E	0 4	02 奥村因幡	20	45才人持頭	12450	0
	J	0 4	03 奥村因幡請地	75	45才前出（人持組頭）	12450	0
	A	0 2	01 奥村伊予（時成）	20	58才人持組頭	13000	0
	J	0 5	17 奥村伊予請地	75	58才前出（人持組頭）	13000	0
	J	0 5	18 奥村伊予請地	75	58才前出（人持組頭）	13000	0
	A	0 2	06 奥村亀松（中務）	30	13才小姓「中務」	550	0
	F	0 5	21 奥村 喜内	30	17才馬廻	200	5
	I	0 4	08 奥村久太郎	30	34才城番馬廻	100	0
	E	0 3	01 奥村源左衛門	20	65才人持（魚津在住）	3200	0
	D	0 3	01 奥村権兵衛	30	50才馬廻	1000	0
	I	0 4	18 奥村権之助	30	46才組附弓大将「権佐」	1000	0
	F	0 5	21 奥村 斎宮	30	19才馬廻	800	0
	J	0 5	19 奥村内匠屋敷内	20	28才人持	2000	3
	J	0 5	20 奥村内匠	20	28才人持	2000	3
	E	0 4	01 奥村又十郎	20	41才人持	2000	0
	H	0 7	07 小倉五兵衛	30	27才城番馬廻	150	1

か

地区	街区	地番	藩士姓名	分類	寛文11年侍帳情報、同帳表記	石高	延宝図 比較
H	04	32	小倉四郎右衛門	30	30才城番馬廻	150	0
H	06	07	小倉宗助	30	27才馬廻	200	0
H	03	09	小倉長左衛門	30	46才射手	200	1
H	07	07	小倉彦二郎	30	55才城番馬廻「彦四郎」	100	0
I	03	04	小瀬甫庵	30	64才組外、書物奉行、医師	200	1
F	06	01	小幡宮内	20	46才人持、火滅没	10950	0
H	07	31	帰山新丞	30	63才馬廻	200	0
J	03	10	帰山助右衛門	30	68才馬廻、境関所奉行	500	0
F	04	12	笠間半七	30	28才馬廻「半七郎」	800	3
I	03	24	加須屋伝兵衛	30	43才大近習、目付	300	0
I	03	14	加須屋八郎右衛門	×40	該当なし	×	1
H	04	46	片岡三右衛門	30	47才馬廻	230	0
J	05	03	勝尾半左衛門	30	61才馬廻	200	0
J	01	05	勝見作右衛門	×40	該当なし	×	1
H	01	06	葛野藤太夫	30	63才馬廻	350	0
F	05	12	葛巻喜市郎	×40	該当なし	×	1
F	04	05	葛巻十右衛門	20	23才人持	2300	0
G	02	23	加藤次兵衛	30	40才馬廻「治兵衛」	700	1
C	03	05	加藤正悦	35	76才組外医師	200	1
G	02	26	加藤図書	20	40才人持	2000	0
I	03	21	加藤彦左衛門	30	65才馬廻	200	0
I	03	13	金森助右衛門	30	74才馬廻	650	0
G	02	22	金森平蔵	30	13才馬廻	600	0
H	06	16	兼松主馬	30	43才馬廻	200	0
F	06	02	神尾数馬	30	48才小姓組首	2200	0
G	03	14	川添八兵へ	×40	該当なし	×	0
H	04	41	河地八郎兵衛	30	20才馬廻	450	0
G	03	17	河地良助	×40	該当なし	×	2
I	02	13	河原兵庫	30	44才馬廻「川原」	500	0
I	04	33	川縁市之丞	30	45才射手	170	0
J	05	09	河村五右衛門	30	63才馬廻	500	0
F	02	36	河村弥右衛門	×40	該当なし	×	1
F	04	08	神田采女	30	50才馬廻	250	0
G	02	17	神戸伊兵衛	30	59才馬廻	500	0
G	02	07	神戸清四郎	30	63才城番馬廻	120	0
G	02	09	神戸半九郎	30	44才射手	350	0
J	04	07	菊田伊兵衛	30	36才馬廻	200	0
I	04	09	菊田長右衛門	30	53才城番馬廻	250	0
H	05	21	菊池市左衛門	30	67才馬廻	200	1
G	02	24	菊池大学	20	63才人持	3000	1
J	01	06	木崎勘十郎	×40	該当なし	×	0
H	07	34	岸 忠兵衛	30	51才馬廻	300	0
H	07	02	岸村五郎右衛門	30	66才馬廻	300	1
H	07	16	岸村六右衛門	30	41才異風	150	3
H	02	10	北川少右衛門	30	54才大近習番頭「庄右衛門」	550	0
H	02	11	北川虎之助	30	14才馬廻	350	0
H	02	09	北川又右衛門	30	49才小姓（馬奉行）	300	0
H	01	01	北嶋八郎左衛門	×40	該当なし	×	0

き

地区	街区	地番	藩士姓名	分類	寛文11年侍帳情報、同帳表記	石高	延宝図 比較		
く	F	0 2	11	城戸七左衛門	30	58才歩組小頭	150	0	
	J	0 5	01	絹川段右衛門	30	45才小姓、賣馬役「団右衛門」	300	0	
	I	0 4	29	木村義太夫	×40	<元年：定番歩>	<100>	2	
	J	0 1	13	木村源左衛門	×40	<元年：定番歩「源右衛門」>	<50>	0	
	G	0 2	19	木村五左衛門	×40	該当なし	×	0	
	I	0 4	16	木村甚左衛門	30	61才馬廻	200	1	
	F	0 1	10	木村甚助	×40	該当なし	×	0	
	G	0 2	18	木村藤兵衛	30	88才馬廻	400	0	
	D	0 1	11	木屋勘右衛門	×40	42才該当なし	×	0	
	I	0 2	19	久徳又四良	30	42才小姓、療馬役「又四郎」	200	0	
	H	0 4	04	桐山吉兵衛	×40	該当なし	×	0	
	J	0 4	06	陸田四兵衛	30	51才馬廻	300	0	
	H	0 4	02	久世七兵衛	30	19才馬廻	284	0	
	H	0 4	01	久世平助	30	56才城番馬廻（割場奉行）	220	0	
	H	0 4	24	久津見少右衛門	30	37才馬廻	200	0	
	H	0 4	26	久津見半左衛門	30	48才城番馬廻	150	0	
	H	0 6	14	はりたて（久保）寿斎	35	65才組外鍼医「久保寿斎」	100	0	
	H	0 4	08	窪田甚助	30	27才馬廻	300	0	
	H	0 4	30	熊谷伊兵衛	30	62才馬廻	250	0	
	け	I	0 5	08	栗田久右衛門	30	40才馬廻	200	0
H		0 2	04	栗田孫八	×40	該当なし	×	2	
E		0 1	04	いしや玄益	×45	該当なし（医者・歩並か）	×	0	
D		0 1	12	いしや玄古	×45	該当なし（医者・歩並か）	×	3	
F		0 3	02	玄硯	×45	該当なし（医者・歩並か）	×	0	
G		0 2	16	いしや見の	×45	該当なし（医者・歩並か）	×	3	
こ		I	0 4	39	小泉勘十郎	30	39才小姓、目付	300	0
		I	0 5	04	河内山忠左衛門	×40	該当なし	×	2
		I	0 4	14	河内山半之助	30	62才城番馬廻「半助」	120	0
		F	0 2	23	かうらい万右衛門	×55	該当なし（御用職人）	×	0
	H	0 4	47	郡 勘三郎	30	58才馬廻、砺波射水郡奉行	300	0	
	I	0 5	03	国府勘助	30	50才異風	150	0	
	I	0 4	22	小塚勘太郎	×40	該当なし	×	1	
	J	0 4	05	小塚善助	30	42才城番馬廻	150	0	
	J	0 4	02	小塚弥左衛門	30	47才異風	350	0	
	A	0 2	04	後藤次郎兵衛	30	33才馬廻	800	0	
さ	H	0 4	39	小西次太夫	30	48才馬廻「治太夫」	200	0	
	H	0 4	20	小林幸庵	×45	該当なし	×	1	
	H	0 4	35	小林三郎右衛門	30	27才小姓	250	0	
	H	0 4	15	小林助八	30	46才小姓	200	0	
	F	0 2	06	小堀新十郎	30	50才馬廻	2000	0	
	H	0 8	13	駒井外記（宗語隠居屋敷）	35	43才組外	20人扶持	0	
	G	0 2	14	駒井主水	30	75才無組付	2000	1	
	H	0 4	13	小森又兵衛	30	30才城番馬廻	150	0	
	C	0 2	07	斉藤四郎左衛門	×40	該当なし	×	2	
	J	0 3	11	斎藤孫市	×40	該当なし	×	1	
C	0 3	08	坂井就安	35	63才組外医師「寿庵」	200	0		
F	0 1	20	坂野一作	30	14才城番馬廻「市作」	40	0		
F	0 2	15	索良八右衛門	×40	該当なし	×	0		

地区	街区	地番	藩士姓名	分類	寛文11年侍帳情報、同帳表記	石高	延宝図比較
し <							

地区	街区	地番	藩士姓名	分類	寛文11年侍帳情報、同帳表記	石高	延宝図 比較
H	0 2	15	高崎半九郎	30	43才小姓	165	0
H	0 4	33	高栖甚右衛門	30	68才小姓 「鷹栖」	200	0
H	0 8	11	高田善右衛門	30	22才馬廻	500	0
F	0 4	21	高田友庵	35	50才組外医師 「祐庵」	200	0
F	0 3	06	高畠五郎兵衛	30	36才馬廻	1100	0
C	0 3	12	高畠彦大夫	30	66才馬廻	800	1
F	0 2	22	高畠木工	×40	該当なし	×	1
H	0 6	05	高柳勘左衛門	30	62才城番馬廻	100	0
H	0 7	09	高柳平右衛門	×40	該当なし	×	1
F	0 4	16	竹田権兵衛	×40	該当なし	×	1
H	0 6	06	竹中伊兵衛	×40	該当なし	×	0
F	0 4	18	竹中是三	35	32才組外、茶堂	100	0
F	0 2	10	竹や 宗林	×45	該当なし (組外茶道)	×	2
F	0 4	15	田伏弥右衛門	30	55才馬廻	300	2
H	0 2	05	田部新助	×40	該当なし	×	5
I	0 4	36	多羅尾左内	30	58才城番馬廻	200	0
H	0 7	11	団 七兵衛	30	34才馬廻	600	0
I	0 4	03	丹波平兵衛	30	27才小姓 (表納戸奉行)「丹羽」	300	0
I	0 3	17	塚本少兵衛	30	46才城番馬廻 (弓矢奉行)	150	0
H	0 7	22	津川九兵衛	30	42才馬廻	400	0
H	0 5	10	柘植数馬	×40	該当なし	×	1
H	0 3	04	辻 市右衛門	×40	該当なし	×	0
F	0 4	06	辻 喜内	×40	該当なし	×	1
F	0 2	34	津田市兵衛	30	46才馬廻	200	0
I	0 4	07	津田右京	30	62才馬廻	700	0
D	0 3	03	津田牛之助	30	24才小姓	300	1
D	0 3	03	津田勘十郎	×40	該当なし	×	5
F	0 1	23	津田喜左衛門	30	35才馬廻	200	0
D	0 3	07	津田内蔵助	20	54才人持「玄蕃」	8000	0
F	0 5	16	津田源右衛門	30	64才大目付	3000	0
F	0 5	17	津田源右衛門請込	75	64才前出 (大目付)	3000	3
D	0 3	03	津田権之助	30	28才馬廻「権佐」	700	0
F	0 2	33	津田主水	×40	該当なし	×	1
I	0 3	10	津田二郎左衛門	30	58才城番馬廻組首	700	0
H	0 4	34	いしゃ (津田) 宗意	×45	該当なし (医者・歩並か)	×	2
H	0 7	20	津田孫十郎	30	52才小姓組番首	650	0
H	0 7	27	津田造酒	30	30才馬廻	600	0
F	0 1	08	土山藤兵衛	×40	該当なし	×	0
H	0 2	07	恒川監物	30	53才小姓組番首	850	0
H	0 2	07	恒川七兵衛	30	41才馬廻	500	0
F	0 2	07	鶴見甚左衛門	30	56才小姓	400	0
J	0 1	14	出口久右衛門	×40	該当なし	×	3
F	0 4	09	出口助十郎	30	22才近習	350	1
H	0 2	05	寺塚宇右衛門	×40	該当なし	×	5
I	0 4	11	寺西三郎平	30	19才馬廻	500	0
E	0 2	02	寺西左平次	30	39才小姓	500	0
I	0 3	08	寺西新七	30	67才組附鉄砲大将	1000	0
J	0 3	08	寺西孫市	×40	該当なし	×	1

と

な

に

地区	街区	地番	藩士姓名	分類	寛文11年侍帳情報、同帳表記	石高	延宝図 比較
I	02	15	寺西木工兵衛	×40	該当なし	×	1
D	03	06	寺西若狭	20	48才人持	7000	0
H	07	14	いしゃ 道悦	×45	該当なし (医者・歩並か)	×	0
C	02	04	いしゃ 道慶	×45	該当なし (医者・歩並か)	×	0
J	01	04	任田久左衛門	×40	該当なし	×	2
J	01	02	任田久次郎	×40	該当なし	×	0
F	04	14	遠田勘右衛門	30	38才小姓	250	0
H	04	19	遠田清助	30	66才馬廻 (普請道具調奉行)	200	0
C	02	03	梅 大学	30	25才馬廻	1500	1
J	03	05	外田小平太	30	38才馬廻「富田」	250	0
H	06	11	富田小兵衛	30	33才馬廻	200	0
H	06	18	富田三郎左衛門	30	20才馬廻	600	0
I	04	38	富田次太夫	30	60才馬廻	300	2
D	02	18	富田治部左衛門	20	37才人持	3000	0
I	04	28	富田助八	30	45才射手	200	0
E	02	03	富田弥兵衛請地	75	*42才小姓	300	0
F	02	32	富永勘六	×40	該当なし	×	2
J	05	16	豊嶋新右衛門	30	46才異風 (鉄砲奉行)	230	0
I	02	18	豊原弥三	×40	該当なし	×	0
H	05	12	内藤市佐	30	44才馬廻「市佑」	300	0
H	05	24	永井主馬	30	45才馬廻	600	1
I	04	15	中川小兵衛	30	68才城番馬廻	100	1
H	07	30	中川主馬	30	78才無組附	800	2
E	01	01	中川八右衛門	30	38才馬廻	350	0
G	03	07	中川八郎右衛門	20	62才人持 (大目付)	5000	0
I	04	02	中川平右衛門	30	45才小姓 (貸銀請取奉行)	200	0
C	02	08	(長崎) 林正	×45	該当なし (医者・歩並か)	×	0
I	03	06	中嶋左助	30	47才異風 (鉄砲奉行)	150	0
G	01	11	御掃除坊主頭 中嶋道円	×45	該当なし (坊主)	×	3
H	07	15	長瀬善右衛門	30	32才馬廻	1000	0
J	04	08	長田少左衛門請地	75	54才馬廻「少右衛門」	200	1
J	03	07	中西小左衛門	30	50才射手	150	0
H	04	10	永原内膳	×40	該当なし	×	1
J	03	12	中村市郎右衛門	30	68才馬廻	300	0
G	02	11	中村九郎右衛門	30	80才城番馬廻	130	0
J	03	14	中村新之丞	30	48才小姓 (金銀入立奉行)「新丞」	500	0
H	04	11	中村助右衛門	30	45才城番馬廻 (改作奉行)「助左衛門」	150	0
J	02	03	中村半左衛門	30	55才馬廻	380	0
H	05	02	長屋五郎右衛門	30	47才馬廻	2030	0
F	05	04	長屋平左衛門	30	42才馬廻「平右衛門」	800	0
H	08	08	成田数馬	×40	該当なし	×	1
H	05	23	成田弥五兵衛	×40	該当なし	×	1
D	02	15	成瀬甚五左衛門	×40	該当なし	×	1
D	01	03	西尾忠三郎	30	20才馬廻	500	0
D	01	03	西尾与三右衛門	20	38才人持	3000	0
I	04	05	西坂伊之助	35	42才組外 (書物奉行)「猪之助」	150	0
F	02	12	西村吉兵衛	×40	該当なし	×	0
H	04	09	西村六右衛門	30	53才馬廻	1000	0

ね
の

は

ひ

ふ

地区	街区	地番	藩士姓名	分類	寛文11年侍帳情報、同帳表記	石高	延宝図 比較
H	0 6	13	西脇勘左衛門	×40	該当なし	×	1
E	0 1	03	日 忠	×45	該当なし (坊主)	×	0
H	0 1	07	丹羽伊兵衛	30	65才馬廻	200	0
I	0 3	09	丹羽織部	30	45才馬廻	1000	0
I	0 4	34	丹羽次兵衛	30	62才馬廻「次郎兵衛」	200	0
H	0 8	05	根比三右衛門	30	54才射手「根来」	250	0
J	0 3	15	野崎市郎右衛門	30	44才小姓(表納戸奉行)「一郎右衛門」	200	0
G	0 2	12	野々村勘左衛門	×40	該当なし	×	2
G	0 3	06	野村五郎兵衛	30	28才馬廻	1200	0
I	0 3	03	野村関之助	×40	該当なし	×	2
F	0 1	22	野村半兵衛	30	33才馬廻	200	0
G	0 3	18	野村与三兵衛	30	37才大近習組番首	1650	0
I	0 3	22	野村六左衛門	30	城番馬廻(堂形蔵奉行)	160	0
G	0 3	13	梅月	×45	該当なし (坊主)	×	1
F	0 1	12	御灰や 孫左衛門	×55	該当なし (御用職人)	▽	0
J	0 3	18	橋爪権三郎	30	48才異風	150	0
H	0 6	15	橋爪宗右衛門	×40	該当なし	×	2
J	0 4	12	長谷川市兵衛	×40	該当なし	×	0
F	0 2	28	長谷川小源太	×40	該当なし	×	0
F	0 4	13	長谷川頼母	30	29才大近習組	1000	3
J	0 1	08	長谷川徳左衛門	×40	該当なし	×	0
F	0 5	10	羽田三右衛門	30	52才馬廻	700	3
H	0 6	10	服部覚兵衛	30	51才馬廻(珠洲鳳至両郡塩裁許)	300	0
I	0 4	21	服部勝兵衛	30	50才射手「庄兵衛」	200	0
H	0 4	17	服部与右衛門	30	45才馬廻(外作事奉行)	200	0
I	0 4	17	林 宇左衛門	×40	<元年：定番歩「平左衛門」>	<50>	1
J	0 3	03	林 助太夫	×40	該当なし	×	3
H	0 4	07	原 九郎兵衛	30	51才城番馬廻(武具奉行)	150	0
I	0 4	19	原 佐左衛門	30	45才射手	200	0
H	0 6	08	原 三郎左衛門	30	36才小姓(公事場目付)	225	0
I	0 4	27	原 八郎右衛門	30	71才馬廻	250	0
I	0 3	18	原田又右衛門	30	35才馬廻(作事奉行)	500	0
H	0 3	01	伴 八矢	20	人持	5500	0
F	0 2	17	伴 無理兵衛	×40	該当なし	×	1
I	0 4	10	半田惣兵衛	30	31才小姓「宗兵衛」	600	0
H	0 2	16	樋口宇右衛門	30	52才馬廻(新川郡奉行)	500	0
J	0 2	02	久田義左衛門	30	66才馬廻「儀左衛門」	500	0
E	0 1	06	久田甚右衛門	30	51才城番馬廻	200	0
I	0 3	01	人見才三郎	30	22才馬廻	200	0
J	0 1	01	平井権右衛門	×40	該当なし	×	0
F	0 5	15	平井二郎兵衛	30	48才馬廻「次郎兵衛」	300	0
F	0 4	03	平岡五左衛門	30	40才小姓	900	0
J	0 2	05	平田次左衛門	30	56才射手「治左衛門」	200	0
J	0 2	07	広瀬藤右衛門	30	59才小姓	150	3
J	0 5	06	広瀬彦市	30	50才異風(鉄砲奉行)	150	0
G	0 2	25	深美縫殿	20	73才人持「縫殿助」	6000	1
F	0 2	30	福嶋山三郎	30	23才馬廻	400	1
H	0 6	06	福田次左衛門	×40	該当なし	×	0

地区	街区	地番	藩士姓名	分類	寛文11年侍帳情報、同帳表記	石高	延宝図 比較
F	04	11	福田惣右衛門	30	60才小姓(表納戸奉行)「總右衛門」	400	1
H	08	03	福田平八	30	57才城番馬廻(茶具奉行)	100	0
I	05	06	藤懸七郎左衛門	30	57才小姓	250	2
I	03	05	藤懸虎之助	×40	該当なし	×	2
C	03	07	藤田玄仙	×45	該当なし(医者・歩並か)	×	0
C	03	04	藤田三雪	35	<41才組外医師「藤田玄碩」父子>	<150>	1
F	02	21	藤田八郎兵衛	30	33才歩組頭	700	0
J	05	10	藤村三九郎	×40	該当なし	×	1
I	02	10	古沢三郎右衛門	×40	該当なし	×	1
E	01	02	古沢豊左衛門	30	35才射手	200	0
I	02	12	古屋喜左衛門	×40	該当なし	×	1
I	02	12	古屋所左衛門	×40	該当なし	×	0
I	02	12	古屋孫市	30	51才小姓組番頭「孫一」	650	1
H	03	07	不破熊之助	×40	該当なし	×	0
J	03	21	不破久米之助	×40	該当なし	×	0
I	02	09	不破左近	30	56才馬廻	600	0
J	03	21	不破四郎三郎	30	52才異風	200	1
H	07	24	不破仁左衛門	30	31才城番馬廻(会所目付)	150	0
H	04	22	不破清兵衛	30	56才馬廻	1000	0
H	04	18	不破伝兵衛	30	34才馬廻	300	0
I	03	11	不破八兵衛請地	75	73才小松馬廻頭「八郎兵衛」	200	0
H	03	07	不破彦三	20	31才人持取次番 組外	4000	1
H	05	25	不破養伯	35	36才組外、外科	150	0
J	05	14	別所三平請地	75	43才前出(馬廻)	1640	0
J	05	21	別所三平	30	馬廻	1640	0
H	03	03	細井弥左衛門	30	48才馬廻	400	0
H	07	25	堀 勘左衛門	30	41才小姓	300	0
F	03	04	堀 七郎兵衛	20	58才人持	1000	0
D	02	14	堀四郎右衛門	×40	該当なし	×	3
J	03	02	堀 四郎三郎	30	61才馬廻	400	0
I	03	16	堀 八左衛門	30	35才馬廻	200	0
I	03	20	堀江少兵衛	×40	<元年：小算用>	<50>	3
E	03	04	堀口弥八郎	35	48才組外「弥三郎」	100	3
F	01	09	堀部小左衛門	30	町同心組	120	0
F	04	10	堀部養叔	35	51才組外、医師	200	0
F	04	17	本阿弥光甫	35	<38才組外「本阿弥光山」父子>	<150>	0
A	03	01	本多安房(政長)	20	43才人持頭	50000	0
F	02	29	本保三郎兵衛	30	45才馬廻	1000	0
F	02	29	本保孫八郎	30	29才馬廻	300	0
G	03	20	前田三左衛門旅屋敷	20	68才小松城代	10050	0
G	03	05	前田七郎兵衛	×40	該当なし	×	1
C	04	04	前田二郎八	30	11才城番馬廻「次郎八」	230	0
H	07	03	前田太兵衛	×40	該当なし	×	1
C	04	03	前田丹後(長時)	20	77才人持(金沢城代)	3000	0
D	04	01	前田対馬(孝貞)	20	44才人持組頭	21000	0
F	02	24	前田主殿助	20	38才人持「主殿」	2450	1
E	01	07	前田八兵衛	30	58才馬廻	500	0
I	04	06	前田平左衛門	30	43才城番馬廻	300	0

地区	街区	地番	藩士姓名	分類	寛文11年侍帳情報、同帳表記	石高	延宝図比較
み	I	0 4	24 前田兵左衛門	×40	該当なし	×	1
	F	0 6	03 前田平太夫	20	52才人持（火滅役）	5000	0
	D	0 4	02 前田又勝（貞親）	20	18才人持	3200	0
	F	0 5	19 前田木工助後家	×40	該当なし	×	3
	G	0 3	15 前波伊左衛門	30	39才馬廻	200	1
	G	0 3	15 前波加右衛門	30	56才馬廻	500	0
	G	0 3	15 前波七右衛門	×40	該当なし	×	0
	F	0 3	09 松平采女	30	42才馬廻	1000	0
	D	0 3	04 松平玄蕃	20	47才人持	4000	0
	I	0 3	02 松原市右衛門	30	52才馬廻（役銀奉行）	200	0
	J	0 3	19 松原久兵衛	×40	該当なし	×	1
	H	0 6	01 神子田牛之助	30	49才城番馬廻（玉葉奉行）	150	0
	I	0 4	37 三嶋半右衛門	30	46才魚津異風	150	0
	I	0 4	30 三嶋彦右衛門	30	52才馬廻（能州四郡奉行）	200	0
	H	0 4	12 水上喜八郎	30	46才馬廻（改作奉行）	200	0
	H	0 4	45 水上左太夫	×40	該当なし	×	1
	H	0 4	42 水越三右衛門	30	53才馬廻	300	0
	H	0 5	08 水野半左衛門	30	46才城番馬廻	150	0
	J	0 5	04 水野半之丞	30	48才小姓（諸方銀奉行）「半佑」	200	0
	D	0 1	02 水野孫左衛門	×40	該当なし	×	3
	H	0 7	17 水原清左衛門	30	（年齢不記）弓大将（縮方裁許）	750	0
	H	0 7	04 溝口十郎左衛門	30	33才大近習組	1000	0
	C	0 3	10 ミなミ	×45	該当なし（奥女中）	×	0
	G	0 2	08 峯 新兵衛	35	51才組外（公事場執筆）「嶺」	80	0
	I	0 4	31 宮井喜兵衛	30	66才馬廻	200	1
	I	0 5	09 宮井太郎右衛門	30	37才小姓	600	0
	I	0 4	41 宮井彦九郎	30	56才魚津異風	150	2
む	H	0 4	31 宮崎清左衛門	30	43才馬廻	400	0
	H	0 3	06 宮崎太左衛門	30	66才馬廻	1000	1
	H	0 4	27 宮崎弥左衛門	30	54才馬廻（会所奉行）	400	0
	F	0 3	03 武藤五郎兵衛	30	21才異風	180	0
	H	0 4	44 武藤少兵衛	30	68才城番馬廻「庄兵衛」	240	0
	H	0 5	22 武藤半左衛門	30	58才馬廻（外作事奉行）	300	0
	H	0 2	14 村上市郎右衛門	30	60才馬廻	1000	1
	H	0 5	14 村上助右衛門	30	51才小姓	500	0
	G	0 2	15 村瀬平右衛門	30	68才馬廻	1000	0
	E	0 2	05 村瀬与三右衛門	×40	該当なし	×	1
も	H	0 5	16 村田五郎兵衛	30	50才城番馬廻	150	1
	F	0 5	14 村田弥三郎	30	22才馬廻	700	0
	G	0 3	11 森 小左衛門	30	46才馬廻	1300	0
	H	0 5	18 森口源助	30	68才町同心組	150	0
や	H	0 8	06 矢師 刑部	×55	該当なし（御用職人）	▽	0
	H	0 8	06 矢師 主殿	×55	該当なし（御用職人）	▽	0
	F	0 1	13 矢嶋長右衛門	×40	該当なし	×	0
	H	0 4	43 矢嶋平左衛門	30	57才射手組番首	400	0
	H	0 4	25 安田平右衛門	30	48才城番馬廻（寄台所執筆）	180	0
	J	0 3	13 宿屋八十郎	×40	該当なし	×	2
	H	0 2	06 柳九右衛門	×40	該当なし	×	2

地区	街区	地番	藩士姓名	分類	寛文11年侍帳情報、同帳表記	石高	延宝図 比較
F	0 1	07	山川平右衛門	×40	該当なし	×	0
F	0 5	20	山口小左衛門	30	27才小姓	200	0
J	0 3	17	山口七左衛門	×40	該当なし	×	1
J	0 1	12	山口弥右衛門	30	39才異風	180	0
F	0 5	08	山口弥五兵衛	30	65才馬廻	400	0
I	0 3	15	山路九郎兵衛	30	37才小姓	400	0
H	0 3	08	山下小右衛門	30	40才城番馬廻（絹布奉行）	150	0
H	0 1	01	山下権兵衛	×40	該当なし	×	2
H	0 4	29	山下治兵衛	30	73才城番馬廻	100	3
H	0 4	03	山下茂右衛門	×40	該当なし	×	0
H	0 1	02	山田清左衛門	30	44才城番馬廻「清右衛門」	200	0
E	0 3	06	たゝらや(山田)藤兵衛	×45	該当なし（豊刺御用30石取2代目）	×	0
H	0 2	05	山田半内	30	42才小姓（金銀小弘奉行）	450	5
H	0 4	50	山田半兵衛	×40	該当なし	×	0
J	0 4	13	山田又太郎	30	44才馬廻	200	0
J	0 4	10	山中喜斎	35	27才組外、茶堂	100	0
I	0 4	32	山部彦太夫	×40	該当なし	×	1
F	0 5	01	山本久左衛門	30	46才平士（組附鉄砲大将）	1200	0
J	0 1	09	山本瀬兵衛	×40	<元年：定番歩>	100	0
J	0 1	10	山本瀬兵衛屋敷ノ内	×40	<元年：定番歩>	100	0
I	0 4	13	山本八左衛門	×40	<元年：定番歩>	60	0
I	0 2	11	山本弥次右衛門	30	54才城番歩組小首	100	0
G	0 3	19	山森伊左衛門	30	47才組附弓大将	2050	0
I	0 4	01	山森助之丞	30	35才小姓「助佑」	250	1
G	0 3	19	山森藤右衛門	30	43才馬廻	500	0
H	0 4	21	山脇市郎兵衛	30	29才小姓（右筆）	150	0
H	0 4	40	山脇玄悦	35	57才組外、医師	200	0
F	0 1	18	湯浅弥兵衛	×40	<元年：小算用>	80	0
J	0 5	11	由比勘兵衛	30	54才小松馬廻頭	300	2
J	0 5	12	由比勘兵衛請地	75	前出（小松馬廻頭）	300	0
I	0 2	17	由比五兵衛	30	56才馬廻	200	1
E	0 2	01	由比五郎左衛門	×40	該当なし	×	0
H	0 7	06	由比作左衛門	30	49才射手	200	0
H	0 8	12	由比善右衛門	30	54才馬廻（出銀奉行）	250	0
J	0 3	20	横地十太夫	×40	該当なし	×	1
A	0 2	07	横浜勘兵衛	30	48才小姓	550	0
A	0 2	02	横山右近	20	45才人持	6000	0
A	0 2	03	横山左衛門（忠次）	20	47才人持組頭	27000	0
A	0 2	05	横山隼人	20	39才人持	2000	0
D	0 2	13	吉田逸角	30	50才小姓（会所奉行）	450	0
G	0 3	10	吉田覚右衛門	30	68才馬廻	700	0
H	0 8	10	吉田左近	30	32才弓大将、射手組支配	850	0
H	0 7	36	吉田次郎左衛門	30	49才異風	150	0
D	0 2	12	吉田段助	30	45才城番馬廻	150	0
H	0 4	37	吉田忠左衛門の場請込	75	65才前出（弓大将）	750	0
H	0 4	38	吉田忠左衛門	30	弓大将、射手組支配	750	0
H	0 5	03	吉田平兵衛	30	52才弓大将	750	0
H	0 5	04	吉田平兵衛の場請込	75	前出（弓大将）	700	0

地区	街区	地番	藩士姓名	分類	寛文11年侍帳情報、同帳表記	石高	延宝図比較	
わ	F	0 1	16	吉田孫助	30	62才馬廻	500	0
	J	0 4	11	脇田九兵衛	30	62才馬廻組頭（獅子土蔵金銀支配）	1700	5
	J	0 5	05	脇田九兵衛請地	(75)	前出（馬廻組頭）	1700	2
	J	0 4	11	脇田小平	30	59才小姓（大金奉行）	300	0
	J	0 4	14	脇田小平請地	(75)	前出（小姓）	300	1
	J	0 3	06	脇葉権右衛門	30	62才小姓（絹布奉行）	400	2
	I	0 4	25	和田七右衛門	30	73才城番馬廻	150	0
	H	0 7	05	和田十郎左衛門	30	49才射手「十郎右衛門」	300	0
	F	0 2	31	和田二郎兵衛	30	29才近習「次郎兵衛」	200	0
	C	0 3	09	和田新右衛門	30	60才小姓	200	1
	I	0 4	12	和田助右衛門	30	25才異風	160	0
	H	0 8	07	和多田八郎兵衛	30	32才馬廻	200	0
	E	0 3	05	渡部伊兵衛	×45	該当なし（御大工）	×	0
	H	0 7	23	渡部休庵	×45	該当なし（医者・歩並か）	×	0
	I	0 2	21	渡部藤左衛門	30	47才馬廻「渡辺」	300	0
	G	0 2	20	渡部八右衛門	30	50才無組付	1200	1
	H	0 5	17	渡部半兵衛	×40	該当なし	×	1

*ここに載せた544件の内訳は、分類20～55の藩士名527件と分類75の武家請地の人名17件である。両者に重複する人名があるが、地番が異なれば1件として区別した。

- (註1) 姓名記載の明らかな誤字は校訂し表記した（油比→由比など）。名前のみ表記が20件余りあったが、このうち医者・掃除坊主で姓が特定できない17名は名前カナをもって五十音順にし、職人・商人たちについては、「だいく」「やし」といった職名肩書の五十音順とした。
- (註2) 「寛文11年侍帳」情報のうち役職名は、主な役職に限定し、() 内に表示した。なお、役料や死去年などの注記は除外した。
- (註3) 絵図の名前表記と「寛文11年侍帳」における名前表記において、異同がある場合、適宜「 」内に侍帳の表記を注記した。
- (註4) 絵図の名前と同一人でなく、子供や父の名前が侍帳に登載されていた場合、「寛文11年侍帳」情報の欄に〈 〉を付した。また「寛文元年侍帳」に掲載された御歩・小算用についての情報も〈 〉を付して示した。
- (註5) 「延宝図比較」欄に示した記号は、次のような比較評価を表す。
- 0＝同一人、もしくは同一人と判断されるもの。
 - 1＝姓は同一であるが、名前が変化しているもの（同姓、代替りのケース）。
 - 2＝姓が変化しているケース（別家異動）。
 - 3＝地種そのものが変化したケース。
 - 4＝「延宝図」に記載がなくなっているケース（「寛文七年図」のみに文字記載）。
 - 5＝「寛文七年図」では空白であるが、「延宝図」に文字記載があるもの。

Ⅲ表 寺社名一覧(135件125寺社)宗派別の五十音順

(神社は寺院のあとに掲載)

宗 派	地区	街区	地番	寺社名等	典拠 記号
時 宗	R	0 9	01	玉泉寺	○
浄土宗	R	0 1	21	覚源寺	◎
15カ寺	S	0 2	05	光学(覚)寺	◎
	R	0 4	03	極楽寺	◎
	R	0 8	15	三光寺	◎
	R	0 4	04	浄安寺	◎
	R	0 8	02	成覚(学)寺	◎
	S	0 2	07	心蓮社	◎
	S	0 2	01	三千仏 善導(道)寺	◎
	R	0 1	10	大門寺	◎
	R	1 2	06	大蓮寺	◎
	Q	1 7	03	如来寺	○
	M	0 2	12	法船寺	◎
	R	0 8	01	妙慶寺	◎
	Q	0 2	01	永福寺	◎
	Q	0 2	02	安楽寺	◎
浄土真宗	Q	1 6	01	永順寺	□
20カ寺	R	0 8	11	願念寺	◎
	P	1 3	19	広齊寺	◎
	Q	1 1	06	仰西寺	◎
	R	0 9	10	光専寺	◎
	M	0 5	03	浄宮寺 (上宮寺)	◎
	R	0 1	04	常德寺	◎
	N	0 4	11	正福寺	◎
	O	1 6	01	常福寺	◎
	R	1 3	01	瑞泉寺	◎
	O	1 6	16	専光寺	◎
	R	0 8	24	善照寺	◎
	Q	1 6	12	善徳寺	◎
	P	0 4	05	善福寺	◎
	O	0 7	22	長徳寺	◎
	O	0 4	05	西末寺門跡	◎
	O	0 4	14	西末寺門跡	◎
	O	0 5	01	西末寺門跡	◎
	O	0 5	02	西門跡末寺	◎
	O	1 6	10	福念寺	◎
	K	0 5	23	慶恩寺	◎
	H	0 8	01	東門跡末寺	◎
	R	0 5	01	照月寺	◎
真言宗	Q	1 1	22	岩倉寺	□
14カ寺	S	0 5	15	永久寺	◎
	S	0 7	02	観音院	◎
	S	0 7	04	堅(賢)聖坊	◎
	O	1 5	04	持明院白鬚大明神別当	◎
	R	0 8	03	真長寺	◎
	N	0 4	10	真福院	◎

宗 派	地区	街区	地番	寺社名等	典拠 記号
真言宗	R	0 9	03	千手院	◎
	R	0 4	06	伏見寺	◎
	R	0 4	13	遍照寺	◎
	Q	0 1	04	宝幢寺	○
	Q	0 7	01	宝幢寺	○
	M	0 5	08	養智院	◎
	Q	0 4	02	集福寺	◎
	Q	0 7	02	波着寺	○
曹洞宗	Q	0 1	08	雲龍寺	◎
20カ寺	Q	0 2	11	栄正寺(永昌寺)	□
	R	0 9	12	開禅寺	◎
	Q	0 1	07	鶴林寺	◎
	R	0 5	09	月照寺	◎
	R	0 8	19	香林寺	◎
	R	0 4	12	国泰寺	◎
	R	0 4	11	金剛寺	◎
	R	0 4	05	松月寺	◎
	Q	0 1	05	松山寺	◎
	N	1 5	36	浄住寺	◎
	R	0 8	16	常松寺	◎
	K	0 5	10	新(真)行寺	◎
	K	0 2	58	瑞雲寺隠居	◎
	K	0 2	61	瑞雲寺	◎
	L	0 2	03	大乘寺	◎
	R	0 8	20	長久寺	◎
	Q	1 7	06	天徳院	○
	K	0 5	08	東岳寺	◎
	K	0 5	08	東岳寺	◎
	R	0 7	01	融山院	◎
	R	0 5	11	龍円(淵)寺	◎
天台律宗	R	0 4	10	西方寺	◎
天台宗	S	0 4	03	西養寺	◎
3カ寺	C	0 4	01	松寿院	○
	R	0 1	03	薬王寺	◎
日蓮宗	S	0 5	07	円光寺	◎
24カ寺	Q	1 4	06	経王寺	◎
	R	0 1	18	高岸寺	◎
	R	0 6	05	実成寺	◎
	R	0 4	02	承証寺	□
	Q	0 1	06	浄(静)明寺	◎
	S	0 5	04	長久寺	◎
	R	0 6	02	法光寺	◎
	R	0 6	01	法蓮寺	×
	R	0 9	11	本覚寺	□
	L	0 2	04	本行寺	◎
	K	0 4	18	本行寺	◎

宗 派	地区	街区	地番	寺社名等	典拠 記号
日 蓮 宗	R	0 6	04	本松（性）寺	◎
	R	0 8	05	本長寺	□
	S	0 2	13	本法寺	◎
	R	0 1	16	本妙寺	◎
	R	0 1	25	本用（因）寺	◎
	R	0 1	17	妙典寺	◎
	R	0 6	06	妙法寺	◎
	R	0 6	03	立像寺	◎
	S	0 4	08	如来寺跡屋敷 蓮昌寺	◎
	S	0 3	05	本光寺	◎
	S	0 2	14	妙久寺	◎
	S	0 5	01	妙泰寺	◎
	P	0 1	05	蓮心寺	×
臨 済 宗 7 カ 寺	Q	1 0	02	献珠寺	○
	N	0 6	13	高巖寺	◎
	R	0 9	02	少林寺	◎
	K	0 4	20	瑞光寺	◎
	R	0 4	07	禅栖寺（文字は「経栖寺」）	◎
	S	0 5	20	普明院	◎
	R	0 4	01	宝勝寺	◎
宗派不明 (9)	R	0 5	10	永伝寺	×
	R	0 1	05	観行院	×

宗 派	地区	街区	地番	寺社名等	典拠 記号
宗派不明	R	0 5	07	玉蓮寺	×
	S	0 7	03	こんかう寺	×
	Q	0 2	12	西照寺	×
	S	0 7	07	地藏院	×
	S	0 4	04	西学寺	×
	O	2 0	03	宝昌寺	×
	S	0 7	12	薬師堂	×
神 社 (11)	S	0 7	06	愛宕	×
	R	0 8	04	稲荷	×
	S	0 7	05	（卯辰）八幡宮	◎
	N	0 9	28	三社宮	×
	R	1 1	02	神明（金沢神明宮）	◎
	R	0 1	14	諏訪大明神	×
	R	0 1	13	（諏訪社）奥坊	×
	M	0 6	02	天神別当 道安	×
	Q	0 3	07	天神	×
	P	0 1	02	いなり 天道院「天道寺」	×
	D	0 1	01	伊勢・福井大夫	×
	S	0 6	10	神主（まりしてんか）	×
	S	0 7	01	摩利支天	×
	O	1 0	07	（安江）八幡宮	×

典拠欄の◎印は「貞享2年寺社由緒書上」「貞享2年御領国神社来歴」に寺社名があるもの。なお貞享2年の寺社由来にみえない寺院については、「延宝年中加越能社寺来歴」に見えた場合○印、「三州寺号帳」でしか確認できないものは□印を付した。これらの寺社由来に見えない寺院名は×印を付した。

IV表 藩役所・公的施設一覧 (58件48施設)

	地区	街区	地番	藩役所・施設名	備 考
あ 行	O	1 5	01	足輕番所 8 力所	一柳監物屋敷の番所
	R	1 0	07	一里塚	北国往還の道標
	R	1 1	10	一里塚	北国往還の道標
	S	0 1	04	一里塚	北国往還の道標
	S	1 4	05	一里塚	北国往還の道標
か 行	S	2 3	05	御馬屋	関助馬場の付帯施設
	S	3 0	17	餌指屋敷	鷹匠関連施設
	F	0 5	13	御借屋	「延宝図」では「御貸家」
	O	0 1	12	川除番人	普請会所属 (浅野川水防施設)
	S	1 8	01	河わら	
さ 行	O	0 6	04	河原番	普請会所属 (浅野川水防施設)
	R	0 1	22	岸 (苗字にあらず)	
	E	0 3	03	公事場	万治年間まで堂形、「延宝図」でも同じ
	J	0 5	15	御蔵番三人	「延宝図」でも同じ
	F	0 4	01	御子々姓御長屋々敷	「延宝図」は「御貸家」とする
た 行	C	0 4	02	御用屋敷	「延宝図」では「女中」屋敷とする
	D	0 4	03	御用屋敷	「延宝図」では「御貸屋」とする
	E	0 4	03	御用地	「延宝図」では「御蔵屋敷」⇒寛文12年に新堂形蔵屋敷地になったため
	S	1 0	03	竿	
	O	1 5	01	侍番所 4 力所	一柳監物屋敷の番所
は 行	K	0 3	05	御鷹部屋	「延宝図」でも同じ
	K	0 4	12	御鷹部屋	「延宝図」でも同じ
	K	0 4	27	御鷹部屋	「延宝図」でも同じ
	O	1 1	14	鋳場屋敷	普請鍛冶の施設か？
	R	0 3	01	鉄砲梁場	
ま 行	Q	1 5	01	土取場	犀川一瀬切り替え時の土砂取場
	O	1 5	01	二重堀	一柳監物屋敷の囲
	M	0 1	10	馬場	犀川べり御馬場
	S	2 3	01	馬場	浅野川べりの関助馬場
	O	1 5	01	一柳監物殿屋敷	寛文5年から預かる
ら 行	K	0 2	62	火除	「延宝図」では岸市左衛門屋敷となる
	L	0 3	05	火除	防火用の空閑地＝「火よけ地」
	L	0 3	14	火除	防火用の空閑地＝「火よけ地」
	L	0 4	01	火除	防火用の空閑地＝「火よけ地」
	L	0 4	10	火除	防火用の空閑地＝「火よけ地」
ま 行	M	0 3	07	火除	防火用の空閑地＝「火よけ地」
	D	0 3	05	御普請会所	「延宝図」でも同じ
	P	0 6	15	船漕場 番人	
	S	2 0	01	堀	
	G	0 1	11	町会所	「延宝図」でも同じ
ら 行	S	1 1	10	町尻	
	L	0 1	10	的場	弓矢の稽古場
	L	0 9	14	的場	弓矢の稽古場
	D	0 1	05	水亀 (水ため)	「延宝図」でも同じ
	F	0 1	04	水ため	「延宝図」でも同じ
ま 行	F	0 2	02	水ため	「延宝図」でも同じ
	G	0 3	02	水ため	「延宝図」でも同じ
	I	0 2	04	籠屋敷	「延宝図」では「地子」地化

*五十音順の読み方では冒頭の「御」を除いた。

*同一地番に書かれた同一文言の文字記載は一括した。

*備考欄には、惣構内部の施設については「延宝図」との比較結果を記し、公的施設について若干の解説を付したところもある。